

宮城県における乳牛・豚・鶏の飼養と技術研究

丹 野 祐 一

(宮城県農試)

このほど、宮城県が公表した「県政発展計画」によると、昭和50年までの10年間に、農家戸数 115,000戸（－8%）に、就業人口は 170,700人（－39.8%）に減少するだろうとしている。

一方、畜産の伸びに対する期待は大きく、乳牛は 128,400頭（3.8倍）、豚 340,000頭（3.2倍）、採卵鶏 2,130,000羽（1.2倍）の増殖計画を立てて、これからあがる畜産物の総生産額を 340億円と見込んでいる。

しかし、本県畜産の現状はかならずしも順調ではなく、幾多の社会経済的あるいは技術的な問題点をかかえている。

1. 乳牛・豚・鶏の飼養現況と問題点

1. 乳 牛

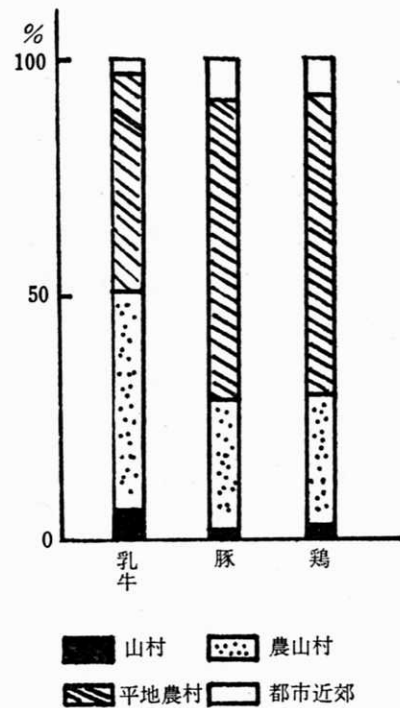
乳牛の飼養頭数は、33年には14,000頭であったが、42年には42,300頭と9年間に28,000頭の伸びを示した。しかし飼養戸数も平行的に増加しているから、一戸当りの平均飼養規模はわずかに 2.4頭で、40年における全国平均の 3.4頭にもおよばない。全国的には飼養規模拡大の傾向が一段とはやまっているときに、本県の酪農がこのように底辺部の移動が緩慢なのは、依然として約半数の乳牛が水田地帯に定着しているためと考えられる。

したがって、本県の酪農が当面している技術的な問題点は10年前とあまり変わらない。しかも一方においては折角造成開設されつつある草地や放牧場の利用性を著しく

低下させる原因ともなっている。

2. 豚

33年における宮城県の豚飼養頭数は23,500頭にすぎなかったが、42年には 180,960頭と順調な伸びを示した。とくに平地農村と農山村への伸びが著しく、飼養頭数の90%はこれらの地帯に分布しているが、都市近郊の養豚



第1図 乳牛・豚・鶏の経済地帯別分布

第1表 宮城県における乳牛・豚・鶏の飼養戸数・飼養頭羽数および伸び率

畜 種	昭 33. 2. 1			昭 42. 2. 1		
	飼 養 戸 数	飼 養 頭 数	一 戸 当 り 模 式	飼 養 戸 数	飼 養 頭 数	一 戸 当 り 模 式
乳 牛	9,500 (100)	14,000 (100)	1.5(羽)	17,380 (183)	42,290 (302)	2.4(羽)
豚	16,900 (100)	23,500 (100)	1.4	37,030 (219)	180,960 (770)	4.9
鶏	102,000 (100)	1,191,000 (100)	11.2	72,400 (71)	1,712,000 (144)	23.6

注. (1) 農林省宮城統計調査事務所資料による。

(2) () 内の数字は伸び率を示す。

第2表 繁殖豚の飼養規模別農家戸数とその割合

一戸当り飼養規模	飼養農家戸数	同 割 合
5頭以下	9,307	94%
5～10	333	3
10～	228	3
計	9,868	100

注. 昭41. 12現在の県畜産課資料による。

第3表 肉豚・飼養規模別農家戸数とその割合

一戸当り飼養規模	飼養農家戸数	同 割 合
10頭以下	26,234	92.0%
10～50	2,095	7.0
50～100	204	0.7
100～	62	0.3
計	28,595	100.0

注. 昭41. 12現在の県畜産課資料による。

は漸次衰退の兆候をみせている。

しかし、飼養規模は一般に小さく、繁殖豚においては5頭以下の飼養農家が全体の94%を占めている。このことは肉豚の場合も同じで、50頭以上の飼養農家はわずかに1%にすぎない。

また、飼養農家の多くは飼料費の値上り、豚肉価格の変動、厚脂対策などに悩んでいるが、最近とくに目立つのは、外国種の導入による雑種F₁の利用である。

3. 鶏

鶏の飼養羽数は近々10年間に144%の増加率を示し、現在1,712,000羽となっているが、飼養戸数は72,400戸(一29%)に減少した。また鶏も他の家畜と同様に、その60%は平地農村に飼養されているが、最近の低卵価や飼料費の高騰などが影響してか、500～1,000羽の飼養階層が減少しているのに対し、20～30羽程度のいわゆるホマチ養鶏と2,000～3,000羽規模の飼養農家が進出している。

2. 技術研究の方向

これまで1においてのべたように、同じ経済家畜でありながら畜種により飼養現況なり、問題点はかなり異なるようである。それで以下には、畜種別にそれぞれの発展方向を意識しながら、技術研究の方向を探ってみよう

1. 乳 牛

乳牛は本来、地域あるいは乳価との関連において飼養形態を異にするとはいい、粗飼料で飼養できる草食性の代表的家畜であるから牧草地を十分に確保しうる地域における発展が経済的に有利性を備えているはずなのに、前述の如く本県の酪農は依然として水田地帯に定着しているために、1～2頭飼いの壁を破れないでいる酪農家が多い。

これを山にあげて飼養規模を拡大し、生産性の高い酪農を営ませるためには、(1)水田輪作酪農の経営技術的研究、(2)草地放牧に関する技術開発の研究、(3)草類の簡易加工、貯蔵利用に関する研究などが必要となろう。

2. 豚

本県の主要家畜のなかで伸び率のもっとも高いのは豚であるが、飼養規模は零細である。とくに近年盛んになった外国種の導入と相まって、生産性の高い養豚を営むためには、今後さらに次のような研究が必要となろう。

(1) 豚の省力管理技術開発に関する研究、(2)豚の雑種繁殖に関する研究、(3)肉豚の品質改善に関する研究。

3. 鶏

本県における主要家畜のなかで、飼養戸数が減少しているのは鶏だけであるが、集団管理技術が確定していないために、一方においては大規模飼育農家の崩解がみられる。したがって、まず鶏の集団飼育管理技術と経営に関する研究が必要になるが、同時に群飼育においても十分能力を発揮しうるような育種改良に関する研究が、今後の重要な課題となろう。